

都立中央図書館の在り方を考える有識者会議 議論の整理

「都立中央図書館の在り方を考える有識者会議 議論の整理」は、各委員の主な意見を整理したものである。

委員名簿

氏名	職名
浅川 智恵子	日本科学未来館館長 IBMフェロー
北野 宏明	ソニーグループ株式会社執行役 専務 CTO
木村 朝子	立命館大学教授
田中 元子	株式会社グランドレベル代表取締役社長
田中 里沙	事業構想大学院大学長
中島 さち子	株式会社steAm代表取締役
吉見 俊哉	國學院大学教授

検討経過

回	日程	内容案
第1回	令和5年7月27日(木)	○都立中央図書館の概要、現在の取組 ○新たな図書館に必要な視点
第2回	令和5年8月29日(火)	○新たな図書館に必要な視点 ○担うべき機能・役割
第3回	令和5年9月21日(木)	○担うべき機能・役割、コンセプト
第4回	令和5年10月2日(月) ～10月10日(火)	○有識者会議の議論の整理 (新たな図書館の機能・役割、コンセプト)

1 これからの図書館を考える視点①

- 最先端の科学技術、図書のデジタル化により、図書館の利用方法がリアルとサイバーワールドの二つに分かれてくるが、「なぜ図書館という物理的な場所が必要か」ということが、今後非常に重要となる。
- ライブラリーキュレーション（図書館の本の分類）によるセレンディピティ（偶然の出会い）が創発性を担保することから、開架は維持又は拡大することが重要である。
- 情報の質の高さ、豊富さ、意外な触れ合わせ方等、これまで情報にアクセスできなかった方、障害のある方達だけでなく、様々な意味で機会のなかった方々にも気軽に触れ合える伝え方、情報との接し方が用意されていると、リアルな図書館がある意義がある。
- 観光という話となると、逆にフィジカルに「そこに行くことに意味がある」と言うことになるので、例えば「建物自体の魅力」や「そこに行ったこと自体の魅力」などが、今後より実世界の方には求められていくのではないか。そういう観点からも、結局、この図書館に誰が何をしにくるのかというところを明確にしておいた方が、明確なビジョンが立てられるのではないか。
- 東京や日本は先進的な課題を抱えており、他の国々よりも一足先に向き合っていくことになる。東京都民や日本の人々、若者達が、社会や未来に対する不安に前向きに向き合える知性があることは希望に繋がる。中央図書館の在り方を議論することは、東京で得られる学びや、東京だからこそ、学びに対してどういう視座で都民が向き合うかについて考えることでもある。
- “Makerspaces are part of libraries' expanded mission to be places where people can not only consume knowledge, but create new knowledge”(メーカースペースは、人々が知識を消費するだけでなく、新しい知識を創造できる場所であるという、図書館の拡大された使命の一部である)という米国の図書館協会の方の言葉がある。図書館が、知を消費する、正しいものが得られる場であるだけでなく、自分がクリエイトする場になりつつある。

1 これからの図書館を考える視点②

- 人生百年時代、リカレント時代の今、誰もが多彩な知に触れて学んで、また教えたり伝えたりするという立場になり、多くの人々が知識のリーダーになり得るという事の認識を持つ必要がある。図書館が拠点になって、そのような人がつながり、増えていくと良い。
- 「ここに来れば東京のことが全てわかる」という東京博物館のような機能を持つことが望ましい。江戸時代だけ、未来だけでもなくて、東京のカルチャーや暮らしがひと繋がりに手に取るようにわかれば、観光客が行きたい場所にもなるのではないか。
- 図書館を、都民や日本の人々が知性、可能性と触れ合う場、海外の方々に「こんな触れ合い方があるんだ」「知性との出会い方って、こんなユニークなことを東京はしているんだ」と気づいてもらう場に行けると良いのではないか。
- 読書に困難を抱える方（reading disability）への支援技術が、障害者だけでなく、一般の人々にも役立つといえる。高齢化とともに読書をする機会も少なくなっていると言われる中、この支援技術を紹介し、広く読書、図書というものを知ってもらうことも、多様性の中で考えていくことが重要である。
- 「東京の図書館の意義」として、外国語対応が挙げられる。テクノロジーを利用してあらゆる言語に対応したサービスを提供して行くことが非常に重要。
- テクノロジーは完璧ではない。テクノロジーのみで人々が自立できるわけではないし、何でも全て一人でできることが自立ということでもない。テクノロジーを最大限利用し、できるだけのことを可能にしながらも、それがカバーできない部分について、人々がコミュニケーションを取りながら、支え合い、助け合うことも大切である。

2 これからの中央図書館が担う機能

- どのような未来の図書館を構想するのかということがこの議論のメインテーマで、中核にあるべきものは本である。デジタル社会の中でも、やはり図書館の中心にあるのは本であるが、それはこれまでの本の概念を超えた「本」(Book Beyond Book)になっていく。
- その「本」には少なくとも三つの特徴がある。一点目は、活字だけではなく、映像や音響、動画や声等が全部埋め込まれていることである。二点目は、インタラクティブであることである。読者が実際に本に書き込んだり、新しい本をそこから作ったりすることが可能になる。三点目はユビキタスで、場所に拘束されない本にもなるということである。ユビキタスな存在としての図書館は、東京の至る所に存在し得るといえる。例えば、あらゆる駅ナカ空間に図書館が作れると、東京の交通網と図書館のネットワークが一体化する形で、電車の乗客が、図書館に関わってくるという未来も想定できる。
- 私たちの体の中には、子供の頃の記憶、家族の記憶や、過去に住んでいた場所の記憶が、身体の中に蓄積されており、いわば私たち自身が本であるともいえる。そして、一人ひとり人間が書物であるとするならば、図書館とは人間を含めた多種多様な無数の書物が集積されて出会う場所ということになる。
- 今のデジタル社会の知の流通の仕組みは一方通行ではなく、あらゆる人が書き手になり、知の作り手になりながら知が循環し、書き換えられていく社会に変わってきている。図書館は、こうした知の循環型、デジタル循環型の社会において、今までのような大量生産、大量流通、大量消費という中で、ストック部分を受け持ってきたこととは違う役割を果たすことになる。
- 「人々が知識を消費するだけでなく、新しい知識を生み出すことができる場所になる」という図書館の拡大された使命を踏まえると、誰もが体験できる場として例えばミシンや3Dプリンターなども含めたようなものづくりの場(メーカースペースのような場)があることが望ましい。

2 これからの図書館が担う機能 (1) WHO「誰が」の視点

- 学びに対して前向きになっている人は、自ら図書館や博物館に行くが、「それが何の役に立つのか」「どうでもいい」と思っている人にこそ、何かのきっかけになると良い。東京の、日本の知性をボトムアップすることは大事な目標として掲げるべきである。
- これまでは調査研究等、目的を持って図書館を利用する人が主な対象であったが、今後は、「本」への無関心層、子どもや障害者など多様な人がターゲットになり得る。目的がなくても、「とりあえず図書館に行ってみたら何かが起きるかもしれない」という創発の装置になり得るような、発想の転換、役割、存在意義の発見、価値の提案があっても良いのではないか。
- 図書館として、本を媒介に様々な層の都民に対して、実際の課題と本をつなぐ立ち位置になれるかどうか大事なポイントとなる。また、図書館を取り巻くステークホルダーとして、来館者以外にも来館を考えている方や図書館を支えてくれる方、図書館で働く人々の位置付けや役割も重要となる。
- メディア変容の中で提供する側とそれを享受する側という二項対立は崩れるべき。今までの来館者はどこかで運営者にならないといけない。一來館者というよりも作り手であり、運営者が育つことが、東京を創る存在、運営主体が図書館を媒介に育つということになる。
- 経済的に豊かではなかったり、家庭や学校等で問題を抱えたりしていても、図書館に来て知の喜びに触れられることが、図書館が担ってきた大きな意味合いである。

2 これからの図書館が担う機能 (2) HOW「どのように」の視点

- 次世代のデジタル技術やツールも活用して、フィジカルとサイバーをミックスした体感型のメニューを提供していくことが望ましい。
- 図書館は、今後、知を消費するだけでなく、知を創造する場となる。この創造という行為には「作る・繋がる」という行為が含まれている。この「作る」と「繋がる」をつなげるのは「本」であり、「本」が核となって「作る」と「繋がる」をつなげるのが図書館である。
- 世界的には、図書館が知を消費する場、正しいものが得られる場であるだけでなく、新しい知を創る場であるという認識が広まっている。何かを作りたくなる場所が日常化されていて、「遊び場」として老若男女が気軽に訪れることができる場が望ましい。
- 図書館の中で飲食をしながら来館者が語り合うシンポジオン（饗宴、シンポジウムの語源）のような場、コンサート、演劇を上演する場、常に様々な映画が上映されている映画館など、パフォーマンスを含めたシアターとライブラリーが限りなくイコールであるという場、音楽があって、工房でもある、こういうものが図書館だという再定義が必要。
- ヘルシンキ中央図書館の空間構成が参考になる。静かに読みたい人、音を出してみたい人、交流したい人、それぞれに応じて空間が繋がりがながらも緩やかに分けられている。
- 市民一人ひとりが作った本は常設ができる。環境を整え、ある程度、作るときに注意するルールを示しておけば、絵本や小説、漫画を作ってここに置いて行ける。それぞれの作品をきっかけに議論が起こることも良いだろう。

3 その他

- 情報系の技術の世代交代は目まぐるしく、すぐに陳腐化してしまう。設備や人材、組織体制等、最先端の技術を取り入れる枠組みの設計をしておくことが大切である。
- 東京全体を図書館と考える場合に、図書館として、ユビキタス的な取り組み、展開について、例えば周りの大学や企業、高齢者施設等、様々な周囲との関係性の中で、どういったことができるのか、それらとの連携を通して考えていくことが重要である。
- 建築やテクノロジーも含めて、どのような空間、作る場、繋がる場などを作れば良いのかは、非常に重要な論点である。静かに本を読みたい利用者に限らず、もしかしたら面白いアニメや漫画、音楽があるかも知れない、自分が何か作れるかも知れないというワクワク感があり、多様なきっかけがあるような場所ができると良い。
- メーカースペースと合わせてライブラリーメーカーズにおける予算を投じた「人づくり」が重要である。まず近隣の専門高校の生徒や大学生等、新たな存在の参画、あるいは意欲のある司書の育成ができると良い。図書館が新しく出来上がるのがもう少し先だとしても、臨時的に始めて、そこで人を育てていくことは考えられる。そこでは従来の司書がしてきたことが活かされるべきである。
- 市民参加型の開かれたプロセスによって、図書館がどうあるべきかを議論していくことが望ましい。
- 司書や来場者といった現場の声やアクティビティ、過去の方角性も踏まえ、議論を進めていくべき。
- 有識者会議で出た議論を提言としてまとめることが望ましい。都民にわかりやすく伝わるような工夫をしていくべきである。

4 今後の中央図書館のコンセプトベースとなる考え方

- これまでの議論の軸となる考えや提案とは、やはり「創造」「クリエイション」ではないか。ある種、新しい東京図書館は、東京都創造図書館というか、Library For Creationであり、この「クリエイション」には、色々な意味が込められている。
- 重要なことは、このLibrary for Creationのクリエイションは、特別な人ではなく、図書館に来た人全員が、それぞれの仕方でクリエイションする。その仕組みをライブラリーは提供する。そこがポイントではないかと思う。
- 図書館に来た人に、「あなたは誰ですか？」「ここはどこですか？」「今はいつですか？」「未来をどうつくりますか？」と言った問いを投げかけ、司書がインストラクトしながら図書館の様々な資料を使って考えてもらう。人それぞれの答えが、本となり収蔵物となっていくという参加型の仕組みを図書館自体の中に組み込んでいくと、それ全体がクリエイションということになる。これらの問いはまさに「人間とは何か」を多角的に考えることであり、「創造図書館」は、「人間図書館」でもあるということになる。